

○ 活動報告

情報誌に白山麓の旅行記を寄稿

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援）

会員制の情報誌「たのし」に白山麓を訪ねた旅の話を書きました。

記事はこちら↓↓

[霊峰白山麓を訪ねる旅-1.pdf](#)  

[霊峰白山麓を訪ねる旅-2.pdf](#)  

これからPDFで発信したり、特使の名刺に添えて手交したりして読んでもらいます。

次回は能登を書きたいと思っています。



初冠雪の白山山頂を遠望する



蛇谷川の渓谷風景 冷たい水には岩魚が住む



日本の滝 100選 姥ヶ流



親谷の湯 混浴の露天から姥ヶ流を眺める



宿の主が撃った月の輪熊の剥製



ふくべの大滝 (落差 86m)



文弥人形の説明を受ける



精巧なつくりの“でく人形”

温泉に湯浴みし岩魚を食す
白山一里野温泉の岩間山荘に泊まった。冬はスキー場になりゲレンデの広さは真一という。まだ陽が高いので、ぶな原生林の

いので谷底へ下りていくと、渓谷の奇岩を縫う清流が見られた。滝は落差76m・幅100m、岸壁を滑るように落ちる流れが、まるで老婆が白髪を振り乱しているように見えるので姥ヶ滝と付けられた。露天風呂(混浴)の真正面に滝が滑り落ちるので、その道力から昔はどすの湯と呼ばれた。この野趣に富んだ秘湯に入浴しなかったことが心残りになっていく。秘境だった地へ来られるようになったのも林道開通のお陰で、お薦めしたいスポットだ。

山麓に伝わる“でく”の舞

2日目、尾口村・東三口集落に保存の文弥人形浄瑠璃(でく)の舞を残す歴史民俗資料館を訪ねた。今から350年程前村

大林(道)歩き森林浴した。道端に猿の群れが屯していたが、人間を見ると森に姿を消した。今では猿や猪、熊の方が優勢で人間は小さくなって暮らしているという。
温泉は24時間源泉かけ流しで一日の疲れがとれた。地酒・菊姫を酌み、岩魚と猪鍋、山菜ご膳で山の幸を楽しんだ。
宿の主人は猟師で、ロビーに刺製の巨大なツキワグマが飾ってある。女将はマタギの妻として白山麓の観光PRに奔走、翌日の観光ガイドも務めてくれた。

の若者が京大阪へ向う、当時流行していた人形浄瑠璃を習い覚え、村に持ち帰り、広めたことが始まりという。山村の厳しい冬の暮らしの中で、農閑期の貴重な娯楽として、綿々と受け継がれてきた伝統芸能である。
保存会長の道下さんからお話を伺うと、酒吞童子など6演目が残っており、国の重要無形民俗文化財に指定されているので、先人の芸能を何とか残したいと懸命に守っているという。哀調を帯びた語り口をVTRで聴き、精巧なつくりの人形を見せてもらった。演目を演ずるには20人の人手を要するが、現在は11人で辛うじて演じている。11月に東京で公演すると聞いた。
過疎化が進んだ村は14戸30人に減り、60歳以上が70%を占める限界集落になった。海抜

490mの豪雪地帯で積雪2、3m、ひと冬6回も屋根の雪下ろしをするため、年寄りにしてもう住めないと離村する人が多い。無人の家屋を見せてもらったが、人の住まなくなった家の傷みは造った村の光景は痛ましい。匠の拙く耐火に工夫を凝らした土蔵建築も放置されたままで、過疎の厳しい山村の現実を見た。
山麓の雅を感じる吉野村
吉野村は吉野10景がある景勝地である。不老橋は手取溪谷の淵を望むビューポイント。綿をちぎったように放下される滝ヶ流や樹齢680年の御仏供杉を観る。国の天然記念物に指定されている見事な倒さ杉で、国司・富樫の別邸もあったといわれる。柿が実りコスモスが咲く懐

かしい山里の風景が広がっている。いのしし焼きなど、わさびそば、いわの塩焼きなど山麓の豊かな食文化があり、令時代から人が住んでいた。今は吉野工芸の里で、古くから開けていた歴史と文化の香りに感じよう。
東京へ帰ってほなく、尾口村の文弥人形浄瑠璃東京公演のチラシを見た。メンバーの高齢化で出前公演はもう止めたという言葉が耳に残っていた。最後の東京公演かもしれないと思いい、スカイツリーが聳える近くの劇場へ足を運んだ。演目は「出世景清」で会場は満員だった。伝統を伝えたいと熱演する村人たちの矜持を感じながら興味深く観た。東京で文弥人形浄瑠璃を観る縁が出来たのも白山麓を訪ねた縁かと思いい、旅の余韻に浸った。(了)